



企業紹介

ミノルタカメラ株式会社

矢田 公太郎*

創 業	昭和3年11月
代 表 者	取締役会長 田嶋一雄 取締役社長 田嶋英雄
資 本 金	103億円 (昭和60年3月末現在)
売 上 高	1,504億円 (昭和59年度)
従 業 員 数	5,850名 (昭和60年3月末現在)
事 業 内 容	①カメラ, 各種レンズ, VTR, 미터その他付属品など ②事務機 (複写機, レーザービームプリンタ, カラーグラフィックプリンタ, ワードプロセッサ, マイクロ写真機器など) ③医用機器 (黄だん計, オキシメーターなど) ④産業用計測機器 (放射温度計, 照度計, TV カラーアナライザー, 輝度計, 色彩色差計など) ⑤プラネタリウムなど
本 社	〒541 大阪市東区安土町2-30 大阪国際ビル TEL (06) 271-2251 (大代表)
研 究 所	技術センター (堺市) 千里センター (豊中市) 東京研究所 (町田市) 高槻研究所 (高槻市)
工 場	堺工場 (堺市) 狭山工場 (大阪府南河内郡) 豊川工場 (豊川市) 三河工場 (豊川市) 端穂工場 (豊川市) 伊丹工場 (伊丹市)

はじめに

ワシントンのスミソニアン博物館には、2台のミノルタ製品が飾られている。「ミノルタハイマチック」と「ミノルタスペースメーター」である。

1962年 (昭和37年), アメリカ初の人間衛星船「フレンドシップ7」がグレン中佐を乗せて宇宙に飛び立ったが、この宇宙船に「ミノルタハイマチック」が搭載されていた。

なぜ、ハイマチックが宇宙カメラに選ばれたのか。NASA (アメリカ航空宇宙局) では、各国のカメラを集め、あらゆる撮影条件のもとでチェックし、最終的にハイマチックを選んだ。結論は一つ、操作が簡単で確実だからだ。今も引き継がれている技術陣の製品開発に対する姿勢の現われである。限りなく、完成度を高めるため膨大なノウハウおよび、オプティクスと、エレクトロメカニクスの最新テクノロジーを駆使し

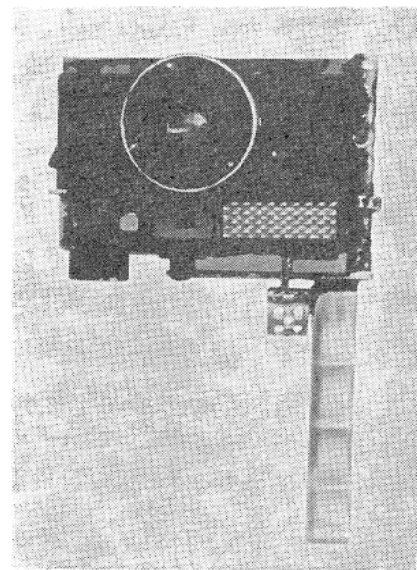


写真1 ミノルタハイマチック (昭和37年)

*矢田公太郎 (Koutarou YATA), ミノルタカメラ株式会社, 生産技術開発部, 技術開発推進課, 技術開発推進課長, 工学修士, 応用物理工学研究科

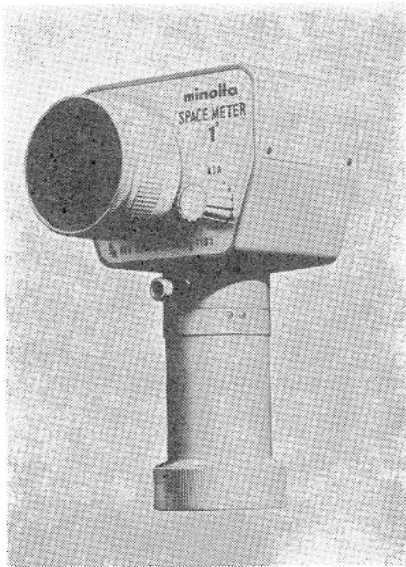


写真2 ミノルタスペースメーター
(昭和43年)

て、ミノルタはさまざまな製品を結晶させている。

1. 伝統と革新

ミノルタカメラが誕生したのは1928年(昭和3年)11月のことである。現 田嶋会長が「日独写真機商店」の称号で、兵庫県の武庫川河畔に工場を建設し、国産カメラの製造に着手したのがそもそもの創りである。

これより先、昭和2年に、田嶋会長は商工省の後援する輸出振興の旅商団に加わり、中近東を廻ったが、その帰途独りヨーロッパに足を伸ばし、パリでたまたま光学兵器メーカー SOM 社を見学、その時、早くも光学機器の将来性に着目、その国産を心ひそかに決意したのであった。

武庫川に建てられた工場は、300坪の敷地に延べ130坪の木造スレートぶきの建物で、当初従業員30人余り、屋根の緑と正面のポプラ並木が周囲の美しい風景とマッチしてスマートな工場であった。

しかし、当時の大阪には精密関係の外注先が見つからず、ネジひとつにしてもロクロでひき、カメラボデーにしても、アルミのインゴットを砂型に流し込んで鋳物をつくり、それを加工して作り上げるというような、今からでは想像もつかない苦勞の多いスタートであった。こう

した生みの苦難を一つ一つ解決していき、機械設備も次第に整備・強化され、作業体制が充実されていったのである。以来57年、光学硝子溶融から一貫したカメラ製造販売に加え、複写機からOA分野に進出するとともに、マイクロ写真機器、プラネタリウム、医用・産業用の光計測機器など、他種分野への展開をはかり、常に最新のオプト・エレクトロメカニクス技術を駆使して、高品質の機器を提供し、消費者各位に質の高い効用を充足してきた。

一方、販売面は、海外進出を先取し、世界に販路を広げ、輸出比率は80%以上、内外関連会社40社を包含し、「歓迎され、信頼される商品とサービスの提供を通じて国際社会に貢献するとともに、企業の安定した発展を図り、あわせて企業に関係する人々に人間性豊かな生活を確保する」との経営理念のもとに、国際企業としての基盤を確立しつつある。例えば、ロサンゼルス・カウンティ美術館を皮切りに、アメリカ・ヨーロッパで巡回展示をおこなった、ミノルタ・インターナショナル・スペシャル「将軍の時代展」等の文化面でも活躍し、多面的に大きく飛躍しようとしている企業である。

2. 明日をめざして

1978年に創業50周年を迎え、さらに創業100周年をめざして新しい世代へ踏み出すため、



写真3 タイムズスクエアに揚がるミノルタの新しいトレードマーク(ニューヨーク市)

1981年2月に CI システムを導入し、その CI にかかげる理念のもとに、ミノルタは、「光を扱い、光を処理する、高品質の機器を提供し、視覚情報の質の向上と拡大を通じて、その効用を充足、心の豊かさ、創造の夢を実現させたい。それには先進技術を取捨し、マーケティングの革新のもとに、国際社会に共存できる企業でありたい。」と考えている。

3. かぎりなく完成度を高める技術陣

(主な製品の紹介)

α-7000

ミノルタカメラが開発した AF (自動焦点機構) 方式の一眼レフカメラ「α-7000」が爆発的な人気を呼んでいる。一眼レフの多機能さを損なわずに、シンプルな操作を実現したのが人気の秘密のようだ (日経メカニカル)。この「α-7000」は、ミノルタの技術スタッフが総力をあげ、4年の歳月と20億円近い開発投資をして商品化した世界で初めてのオートフォーカス機構搭載の高級一眼レフ (日本工業新聞) と、種々の話題を提供してくれた「α-7000」は、カメラを対象とした日本で唯一の賞である「カメラグランプリ '85」を受賞し、ミノルタ技術陣のパワーを遺憾なく発揮してくれた。



写真4 ミノルタ α-7000 (昭和60年)

インフィニウム

“科学万博一つくば '85”の政府館“つくばエキスポセンター”内「コズミックホール」に設置されている当社の新世代のプラネタリウム「ミノルタインフィニウム」も、科学万博にふさわしいオプトメカトロニクス技術の粋を集めたものである。CAP (コンピュータ・エイデ

ッド・プラネタリウム) コントロールシステムによって、地球上からだけではなく、太陽系内のあらゆる位置からみた宇宙を正確にシミュレートすることができる新世代プラネタリウムである。直径 25.6m の世界最大のドームに、世界最多の 23,000個もの星や地球以外の惑星から見た星空などを投影できる機能を持っており、科学万博が始まった3月からは、来場者を神秘とロマンにあふれる宇宙空間へ誘い、ミノルタの技術力の一端を御理解いただくと同時にまったく新しい宇宙旅行を経験していただいている。

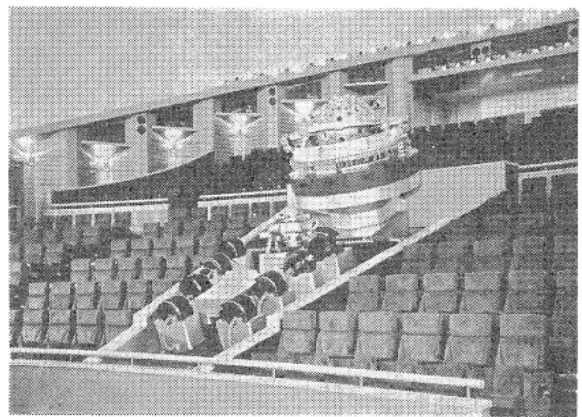


写真5 ミノルタインフィニウム (昭和60年)

CABWORD 7 (ワープロ)

視覚障害者だけでなく晴眼者も使用できる点字ワードプロセッサ「ミノルタ CABWORD 7」。入力した文書を、日本点字表記法に基づいて自動的に点字文書に変換し、6点点字でアウトプットが可能。しかも、入力された文字や作成された文書、オペレーション指示などが音声合成装置によって確認できるため、発売以来、親切設計と好評いただいている。

ズーム PPC

ズーム PPC (普通紙複写機) も PPC の完成度を高め、ミノルタが他社に先きがけ開発した複写機の一つです。ここにもミノルタ技術陣の基本的な考えが現われている。“人間を縛りつけ煩雑な操作を次々に押しつける複写機からユーザの使い勝手を究極まで追求したコピーロボット”という開発コンセプトが、すなわちミノルタの人間中心の OA 思想が、ミノルタに他社に先きがけてのズーム PPC 誕生をもたら

した。

産業用計測機械・医用機器

ミノルタは、アポロ計画に採用され、その実力を立証した測光測色技術に、エレクトロニクス技術を融合させ、人間の眼に代わる、的確で効率の高い計測機器を製品化してきた。

その製品群は、昭和50年以降だけでも、道路標識・信号・空港の進入灯などのチェックに使用される輝度計、工場・病院・ショールーム・温室などの明るさを管理するデジタル照度計、印刷物や染料・塗装などの色判定に利用されている色彩色差計など、10数種類を数えている。

そして、ミノルタの光計測技術は、溶鉱炉の温度管理など、非接触での測定が要求される分野へ、医用機器の分野へと応用展開されている。

4. むすび

ミノルタの製品・企業内容などについては、他にも種々紹介されているので、ミノルタの製品開発・製造・販売の底流に流れる基本的な考え方を、技術的側面から紹介した。

今後も、ミノルタは国際社会で個性ある視覚情報機器メーカーとして、世界のリーダーシップをとりつつ、新しい時代に調和した発展を考え、つねに同業他社や異業種との協業・協調を指向します。(その一つが「エルンスト・ライツ社」との10余年にわたる提携となって現われている。)

ミノルタは国際ブランドとして、視覚情報文化の担手として、たゆまないチャレンジを続けるべく、今後も一層努力してゆきたい。

